Roger M. Savory
Iran under the Safavids

羽田　正

I

最近のイスラム時代イラン史研究を概觀する時、サファヴィー朝時代に關する史料の校訂、翻譯や著書、論考數の著しい增加には目を瞠るものがある。史料關係だけをとり上げても *Aḥsan al-tawārīḫ* 第十二卷の新しい校訂テキスト（A. Nawai, Teheran, 1979）、*Ḫulāṣat al-tawārīḫ* のシャー・タフマスプ時代の部分の校訂（A. Iškāqt, Teheran, 1980）, *Tārīḫ-i ʿālam ārā-yi ʿabbāsī* の英譯（R. M. Savory, Boulder, 1978）、數多くのファルマーン、手紙、文書類を校訂、翻譯した Fekete の大著（*Einführung in die Persische Paläographie*, Budapest. 1977）など皆ここ五年間の成果である。論考に至っては筆者の關心をひくものに限っても十指に餘る。これは一つにはイランで新しくテキスト校訂者が育ってきたこと、また一方では歐米のイラン史學界に若い優秀な研究者が輩出してきたことによるものであるが、新しい潮流として歡迎すべきであることは言うまでもない。このようなサファヴィー朝史研究の隆盛を象徵する出來事の一つが本書「サファヴィー朝時代のイラン」の出版と言えよう。表紙見開きに本書の目的として「學生や一般讀者に、專門用語を使わず、サファヴィー朝の分かりやすい歷史を提供すること」と明記されているように、本書は純粹の意味での研究書ではない。しかし內容はかなりレベルの高いもので、ある程度今日の學界の研究水準を示しており、サファヴィー朝史入門書としては恰好のものと言える。このように高度なかなり特殊なテーマを扱った概說書が出版されること自體、この時代の歷史についての一般の關心の高まりを示して餘りある。

著者 R. M. Savory は現在カナダのトロント大學敎授で、上述の *Tārīḫ-i ʿālam ārā-yi ʿabbāsī* の英譯者でもある。一九五八年ロンドン大學に Ph. D 論文 "*The Development of the Early Safavid State under Ismāʿīl I and Ṭahmasp*"（イスマーイール一世、タフマスプ時代サファヴィー朝國家の發展）を提出し、以來二十年餘に亙って主にサファヴィー朝政治史、制度史に關する論考を發表している。

書評に先立ち、本書の構成をまず紹介しておきたい。

一、アルダビールの敎主たち
二、神政國家：シャー・イスマーイール一世の治世（一五〇一―一五二四）
三、國內紛爭と國外の敵：一五二四年から一五八八年のサファヴィー朝國家
四、サファヴィー帝國の極盛期―シャー・アッバース大帝の時代（一五八八―一六二九）
五、サファヴィー朝期の西洋との關係
六、花開く藝術
七、〝イスファハーンは世界の半分〟―シャー・アッバースのイスファハーン

八、サファヴィー朝國家の社會經濟構造
九、知的生活
十、サファヴィー朝の衰退と滅亡
註
索引

この目次からも分かるように、著者はサファヴィー朝期イランの政治、外交、經濟、社會、文化のすべての分野に亙る敍述を意圖している。當然著者の專門分野以外は、主に他の研究者の研究成果が利用されることとなる。この觀點から本書の內容を二つに區分すると、一章から四章までが主に著者自身による研究、五章以下が各分野の專門家の研究を總合して述べたものということになろう。研究分野によってムラがあるとはいえ、ある程度最新の成果が取り入れられており、簡潔にして要を得た記述に筆者自身色々敎えられる點が多かったことをまず申し述べておかねばならない。以下順次筆者なりの感想、疑問點などについて記して行くが、その際、政治史の敍述を主とする第一部の主として著者による研究の部分は、その性格上、內容の要約が困難なので、單に問題點を指摘するにとどめることを諒とされたい。

II

サファヴィー家の祖先、サファヴィー敎團の時代、イスマーイールの擧兵と建國からタフマスプの長い治世を經てアッバースによる最盛期の現出に至るサファヴィー朝の興隆史とそれに關する諸問題が語られているのが第一章から第四章までである。初期の國家體制の特徵、シャーの權力の據って立つ三つの基盤、ワキールという職の持つ意味の變化とそれに伴う官僚機構の變容、シャー・アッバースの改革の意義など著者年來の主張が改めて論じられている部分が多いが、それ以外に新しい見解も見られる。いわば著者積年の研究の要約にあたるのがこの部分である。その意味では本書の核とも言うべきものであろう。これら著者の所說を總合したサファヴィー朝國家論について、筆者はいささか贊成し難いものがあるが、これに論及することは、與えられた枚數では不可能に近く、また書評の枠を越えることにもなるので近い將來別の形で發表することとし、ここではそれには一切觸れず、具體的な幾つかの問題のみを檢討することにしたい。

まず、サファヴィー家の祖、サフィーがサファヴィー敎團の指導權をその一族の手で保持するようにしたことは、彼が既に早い時期から敎團を政治權力への踏み臺にしようと意圖していたことを示す、と著者は言うが（九頁）、このように斷定できる根據があるのだろうか。敎團の指導權を一族の手で保持することが直ちに政治權力への野心と結びつくとは思えない。從來の研究では、サフィーは專ら沈思瞑想の生涯を送り、敎團が政治活動に入るのははるかに下って十五世紀のジュナイドの時期からと言われており、著者はこれに對する具體的な反論を示していない。敎團の性格がどのように變化していったかを把握するためにももう一言詳しい說明が欲しいところである。また、サフィーの若い頃の生活狀況、土地賣買やワクフなど敎團の經濟問題に關して著者の筆は滯りがちだが、これについてはオバンの論考があり（J. Aubin, La propriété foncière en Azerbaydjan sous les Mongols, *Le monde iranien et l'Islam*, IV, 1976—77）、これによって我々はかなりの程度初期サファヴィ

ー教團の經濟狀況を知ることが出來るのである。同じく初期サファヴィー教團のシャイフについて、著者は Ḫwāǧa ʿAlī を Ṣadr al-Dīn の息子としているが（一三頁）、これは孫の誤りであろう（cf. J. Aubin, op. cit., p. 86）。

次に、著者はイスマーイール時代の重臣の一人 Dūrmiš Ḫān Šāmlū の父を ahl-i iḫtiṣāṣ（選ばれた人々）の一人と考えているが（四一頁）、かつて筆者が述べたように、創建當初のいわゆる〝キジルバシ〟は二つのグループに分かれており、Dūrmiš Ḫān の父 ʿAbdī Beg はサファヴィー教團時代からの信徒代表とも言うべき〝選ばれた人々〟の一員ではなく、一四九九年の擧兵時にイスマーイールの呼びかけに應じて小アジア、シリアの各地から彼のもとに馳けつけたトルコマン遊牧部族グループの中の主要人物であった（拙稿「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』三七―二、四七頁參照）。キジルバシを二つのグループに大別して考えて初めて建國當初の多くの政治的事件の背景が明らかになるのであり（例えば Ḥusayn Beg Šāmlū のワキール位解任、イスマーイール死後の Div Sulṭān Rūmlū と Kupak Sulṭān Ustāǧlū、更に Čuha Sulṭān Takkalū とのワキール位爭いなど）、この點で著者のこの時代に關する一連の政治史解說は考察不足と言わざるを得ない。

タフマスプ時代の特に初期、內にトルコマン部族間の抗爭、外にオスマン・トルコ、ウズベクの侵寇という正に內憂外患の中で、サファヴィー朝が存續し得た理由の一つとして著者は、シャー・タフマスプの爲政者、軍事指導者としての能力を擧げている（五七―五九頁）。これは從來の定說とは全く逆の考えであるが、筆者もこの著者の意見に全く同感である。著者は、一五四〇年頃から何度も行なわれたコーカサス遠征を、戰利品を得ることの他に、オスマン・トルコとの戰いを前にして、比較的與し易いコーカサスの軍隊を相手にキジルバシ軍に戰いの經驗を與えること、戰鬪精神の高揚、戰鬪能力の強化を目指したタフマスプによる愼重な政策であると述べる。また、ムハンマド時代の一五八五年に、ジョルジア人が王子の一人の師傅となっていることを指摘し、ここまで既にこの新勢力が王朝內部に入り込んでいることからも重要な社會的變化はアッバース時代以前（卽ちタフマスプ時代）に起きており、タフマスプがこの第三の民族をキジルバシに對抗する勢力として考えた上で導入したのだと斷定する（六四～六五頁）。傍證としてタフマスプの王子九人のうち、ムハンマドとイスマーイールを除く七人が、コーカサス地方出身の母を持つ事實なども擧げられており（六八頁）、かなり說得力のある推論と言えよう。從來タフマスプは不當なまでに低く評價されていたが、十歲で卽位し、キジルバシ部族間の權力爭いに惱まされながらも、卽位後十年でキジルバシを押さえて實權を自らの手に收め、オスマン・トルコのスレイマン大帝の數度に亙る東方遠征に一步も退かず戰って大部分の領土を守り拔いた（バグダードを失なったとはいえ）彼の爲政者、軍事指導者としての有能さは疑うべくもなかろう。アッバースの樣々な改革の原型がタフマスプ時代に既に形成されていたと考えるのも決して無理ではない。殘念ながら我々は今のところこの假說を證明するはっきりした根據を持たないが、タフマスプ時代の重要性を指摘したセイボリーの主張は傾聽に値する。今後この推論を如何に立證して行くかが問題となろう。またこの爲政者としての有能さと共に、著者は第六章で、藝術愛好者としてのタフマスプについても言及しており（一二九～一三

一頁)、これによって讀者は前世紀以來のこの王についての誤った固定觀念から解放されることになろう。

一五三〇／三一年の Takkalū 部族大彈壓以後この部族は政治史上で何ら重要な役割を果たさなかったとあるが(五五頁)、アッバース一世即位直前、ハムザ・ミールザーの攝政時代、Turkmān, Takkalū 兩部族連合軍が、ハムザを支持する Šāmlū, Ustāǧlū 部族軍に對抗して別の王子を戴いて戰いを挑んだことはよく知られている(*Tārīḫ-i ʿālam ārā-yi ʿabbāsī* のセイボリー英譯、四五五頁以下參照)。そしてアッバースの時代になってもなおその殘存勢力は根強く、一五九六—七年、アッバースはこの部族の徹底肅清を行なっているのである。タッカルー部の勢力が本當に衰えるのはこの時以後のことである。この例、それに先ほど述べた初期のキジルバシの捉え方などから分かるように、著者のトルコマン遊牧部族—キジルバシ—に關する研究にはやや甘さが殘るように思われる(例えば F. Sümer, *Sefevideveletinin kuruluşu ve gelişmesinde Anadolu Türkerinin rolü*, Ankara, 1976 が利用されていれば本書の記述は相當異なったものとなっていたであろう)。

アッバース一世の軍事改革についての著者の見解には疑問點が多い。今三點擧げてみる。

(1) ゴラーム部隊を初の常備軍(a standing army)と考えているが(七九頁)、既に建國當初からトルコマン部族出身者によるコルチと呼ばれる常備軍が存在した(前揭拙稿三三—三七頁)。

(2) イラン人を中心とした tufangčiyān(銃士)を常備軍と見做しているが、果たしてそうであろうか。彼らは平時は農耕に携わり、一旦事あると各地方毎に一つの集團に編成されてシャーのもとへ馳せつけた。もしこれを常備軍と言うなら、普段遊牧を行ない、戰時にシャーのもとへ參じるトルコマン遊牧民もすべて常備軍ということになってしまう。宮廷に少數の銃士が常に侍していたことは事實だが、彼らは主にゴラーム出身のものたちであった。

(3) この改革によって近衞兵(the royal bodyguard)の數が三千人に增やされ、すべてゴラームから選ばれたと著者は言うが(七九頁)、何を根據にこのような結論が出て來たのであろうか。著者自身が翻譯された *Tārīḫ-i ʿālam ārā-yi ʿabbāsī* の中にあるタフマスプ沒時のアミール表に、當時宮廷に四五〇〇の近衞兵コルチ(*gūrčis* of the royal bodyguard)がいた、と記されているが(セイボリー譯二二八頁)、これ以後近衞兵は一旦減員され、それがまた三千に增員されたのだろうか。窺い知る限りではそのような史料はない。またアッバース時代にも、ゴラーム出身だけでなく、キジルバシ出身の近衞兵(コルチ)が存在したことは確實である。

以上四章までの內容について述べてきたが、最近の成果までが比較的よく取り入れられている五章以下に比べて、著者の研究を主とする四章までは、どうも當然參照されるべき論考が無視されている場合が多いように思う。既に二、三例を擧げたが、それ以外にも例えば中央權力機構、地方統治については眞先に引用されるべき K. M. Röhrborn, *Provinzen und Zentralgewalt Persiens im 16 und 17 Jahrhundert*, Berlin, 1966 がおちているし、タフマスプ時代初期のウスタージルー部反亂に關しては J. L. Bacqué-Grammont, Une liste d'émirs Ostâǧlū révoltés en 1526, *Studia Iranica*, 5—1, 1976, Un document Ottoman sur la révolte des Ostâǧelū, *Studia Iranica* 6—2, 1977 によって數多くの新しい事

實が附け加えられた筈である。本書が一九八〇年におけるサファヴィー朝研究の水準を示すからには、もう少し基本的文獻に遺漏なきを期して戴きたかった氣がする。

III

五章以下については、筆者も一讀者として通讀したに過ぎず、內容の當否を云々する能力はもとよりない。そこでここでは各章毎の內容をまとめて紹介し、若干のコメントを加えるにとどめたい。

イラン・ヨーロッパ關係を扱った五章では、サファヴィー朝以前のイ歐關係、十六世紀のペルシア灣をめぐるポルトガル・イギリス・イラン三者の關係、更に十七世紀に入ってオランダ、フランス、ロシアの進出など、ヨーロッパ列強とイランとの外交關係が簡潔に分かりやすく述べられている。但し外交關係の敍述に重點が置かれているため、民間ベースの兩者の關係には殆んど觸れるところがない。サファヴィー朝時代、多くのヨーロッパ人修道僧が各修道會から派遣されてイラン各地で傳道に從事し、また多くの商人がイランを訪れている。彼らの多くが旅行記など何らかの記錄を殘しているだけに、これらを有効に使った概說がなされていたらと思うのである。著者の記述のもととなっているのは L. Lockhard, *The fall of the Safavi dynasty and the Afghan occupation of Persia*, Cambridge, 1958 であるが、これ以後の諸研究（例えば Schuster-Walser, S., *Das Safawidische Persien im Spiegel europäischer Reiseberichte* (1502—1722), Hamburg, 1970, A. Kroell, Billon de Canceville et les relations franco-persanes au début du XVIIIe siècle, *Le monde iranien et l'Islam*, II, 1974 など）は參照されておらず、この章に限っては必ずしも最新の成果をまとめたものとはなっていない。

六章では藝術、工藝の發達が、ミニアチュール、書道、絨緞、織物、陶器、金屬器の各分野毎に Welch, Pope などの研究に基づいて要領よくまとめられている。

七章は、シャー・アッバースの時代に王朝の首都となったイスファハンの町について述べたもので、その壯麗な建造物、シャーや貴族、市民の生活などが主にヨーロッパ人旅行者の記錄を基にして描かれている。一九七四年に出版された *Iranian Studies* のイスファハン研究特集號（Studies on Isfahan）の成果が隨所に採り入れられ（例えばアルメニア人の居住區ジョルファについて）、樂しい讀み物になっている。從來のイスファハン研究の總まとめと言えるものである。このところ、都市としてのイスファハン研究は一種の流行らしく、つい最近も R. Quiring-Zoche, *Isfahan im 15 und 16 Jahrhundert*, Freiburg, 1980 が出た。今後の研究の發展が樂しみな分野と言えよう。

第八章は二部に分かれ、一部が「サファヴィー朝社會の構造」、二部が「サファヴィー朝經濟の性格」と題されている。この社會が頂點にシャー、底邊に一般民衆、中間に軍事、文民、宗教關係の貴族がいるというピラミッド型社會であったこと、國內產業の二つの基礎として牧畜、農業があったこと、シャーが最大の資本家で最大の雇用者であったこと、この期間の外國貿易の發展とその重要性などが指摘、說明される。下敷とされているのは V. Minorsky, *Tadhkirat al-Muluk*, London, 1943 の中のサファヴィー朝社會概說である。このミノルスキーの書が出て既に四十年。今だにこの書

を超える概説が現われないことは誠に殘念であるが、同時にこの書が如何にすぐれた先驅的業績であったかがよく分かる。ただ一つ本章中で氣になったのは、サファヴィー朝社會が能力主義社會であったとのセイボリーの主張である（一八三頁）。著者は賤しい身分から高官に昇進した例を幾つか擧げ、更にキジルバシの中でさえ、サファヴィー朝一代を通じて支配的な部族がなかったことなどからこのような結論を引き出しているのであるが、反論はたやすい。前代の白羊朝時代から國家の樞要な官僚の地位にあったイラン人の家系がサファヴィー朝の時代になっても變わらず重要なポストを占めていたことがオバンによって實證されている（J. Aubin, Etudes Safavides I: Šāh Ismā'īl et les notables de l'Iraq persan, *Journal of Economic and Social History of the Orient*, II—1, 1959）。また、ペトロシェフスキーも、Ḫān や Sultān などの稱號は個人的なものではあったが、實際には親から子へ次々と引き繼がれていった、と述べ、既得權益の世襲化傾向をサファヴィー朝社會の一つの特色としている（И. П. Петрушевский, *Очерки по истории Феодальных Отношений в Азербайджане и Армении в XVI-Начале XIX вв*, Ленинград 1949, стр. 99）。筆者の知る範圍でもイスマーイール一世時代に既にホラーサーン總督に任じられていたシャームルー部の Dūrmiš Ḫān の一族は途中多少の中斷はあったにせよ、アッバース一世の時代に至ってもなおその地位を保持していた。そして創建當初よりキジルバシ中一、二の勢力を誇っていたシャームルー部出身の人物がアッバース二世時代にもなお最重要官職の一つコルチバシの地位を占めているのである。筆者には著者の擧げている二、三の例はむしろ例外の樣に思える。

九章は「サファヴィー朝下の知的生活」と題され、文學、哲學、それに自然科學の發展などが論じられる。從來サファヴィー朝の時代は、それ以前の輝かしいペルシア文學の傳統が斷絕し、文學的には不毛の時代であったとされる。最近 Ehsan Yar-Shater はこれに對して反論を試み、それまでの詩の概念、形式がこの時代に大きく變化し、このため從來の研究者はこれをペルシア詩の墮落であると考えたが、實はこの〝サファヴィー形式〟こそ今日の現代詩にまでつながるすぐれた新形式であると述べ、サファヴィー朝時代の詩、詩人を再評價している（Ehsan Yar-Shater, Safavid literature: Progress or Decline, *Iranian Studies*, VII No. 3—4, 1974）。著者はこの新説を本章で紹介し、さらに哲學、形而上學についても Naṣr らの説に從って、從來の低い評價を改めることが必要だと說く。論旨の是非はとも角、筆者は本書中この章を一番興味深くまた樂しく讀んだ。

最後の十章は、アッバース一世死後のサファヴィー朝衰退と滅亡の歷史が Minorsky の *Tadhkirat al-Mulūk*, Lochard の *The fall of the Safavi dynasty* を主な典據として述べられている。この時代に關しては、良好なペルシア語史料がないせいもあって、まだ論考の數も少なく不明な點が多い。今後著者による政治史研究がこの時代にまで及ぶことを期待したい。

IV

以上各章の內容についての感想、疑問を思いつくままに書き綴ってきたが、次に本書全體の問題として參考文獻の引用註記について

一言觸れておきたい。

本書は概説書とはいえ、かなり高度な内容を扱っているため、往往にしてペルシア語、歐文史料から直接の引用がなされている。ところが特に歐文史料が原典から引かれる場合、その註記の仕方が通常一般に用いられている方法とはかなり異なっており、このことが本書の價値を著しく損ねているように思われるのである。今例として、シャルダンの旅行記の註記法を擧げて說明してみよう。本文中にシャルダンの書を引用した際の卷末の註記として次のケースがある。アムステルダム版（*Voyages du Chevalier Chardin en Perse et autres lieux de l'Orient*, 10vols. 1711）からのフランス語による直接引用（五四—五五頁）、著者の英譯の引用（二三九頁）、G. N. Curzon, *Persia and Persian Question*, London, 1892 の中で翻譯、利用されている一八一一年パリ版の再利用（二六二頁註二七）、A. V. Pope, *A Survey of Persian Art*, Oxford, 1938—58 に引用されている部分の再利用（二六一頁註六二）、P. M. Sykes, *A History of Persia* に引かれている文の再利用（一〇三頁）、R. Stevens, European visitors to the Safavid court, *Iranian Studies*, VII, 1974 に引用された文の再利用（二六二頁註四三）と實に樣々である。察するところ著者は、他の研究者の論考、著書に引用されているシャルダンの記事を利用する際には、その論考の該當ページをそのまま註に組込んでいる樣だが、これはあまりにも安易な態度ではなかろうか。どうしても手に入らない稀覯本の類なら仕方がないが、對象は有名なシャルダンの旅行記であり、著者自身アムステルダム版から直接引用している場合もあるのだから（但し、最も良い版本として一般に研究者に利用されているのは、一八一一年のパリ版である）、それぞれ原典にもう一度あたって註記すべきであろう。他の歐文史料についても、Herbert（二五九頁註一六）、Krusinski（一四〇—四一頁。この場合はわざわざ史料からの引用として活字のポイントがおとされているにもかかわらず、註には Pope の書名のみが記されている）、など皆同樣の現象が見られる。

これと同樣に筆者にとって不可解なのは、英語以外で書かれた歐文史料の取扱いである。Tavernier はすべてフランス語原本から引用されているのに對して、Thévenot の書は英譯本、Olearius は佛譯本が利用されている。翻譯を使用せねばならない必然的な理由があるのだろうか。また Sanson, *The present state of Persia* (Paris, 1695)（二五八頁註八）という書物の存在を筆者は知らない。

以上多少くどく本書の文獻關係の缺點を繰返したのは、それがこの著者の書を繙く際に常に目につき、氣になる點だからである。本書の場合特に入門書と斷わっているのだからより一層この點に愼重であってほしいと思う。

どちらかというと批判、望蜀の言の多い書評となってしまったが、これは決して筆者の本意ではない。本書が入門書としての水準に達していることに異存はないし、であるからこそ一層完璧を目指して注文が多くなるのも致し方ないことであろう。今後サファヴィー朝史、更にイラン史を學ぼうとする人々にとって本書は好箇の入門書となろう。

Cambridge, 1980.
23cm x＋277pp.